

糖餅行のギルドホール馬神廟と祭神

尾 上 葉 子

はじめに

糖餅行とは、清代の北京に存在した菓子屋および菓子職人のギルドのことである。糖餅行は外城の広渠門内にあった馬神廟にギルドホールを置き、雷祖を自分たちの主祭神として祀り、活動をおこなっていた。奈良史学第七号（一九八九）に掲載させていただいた論文では、糖餅行を取りあげて、その起源・祭祀・行規・衰退、および馬神廟の起源の各項目に分けて述べるとともに、北京の菓子屋と菓子、そして菓子と北京の人々とのかかわりについても触れている¹。今回の小論では、前回詳しく論じることができなかった、馬神廟がなぜギルドホールになったのか、雷祖がどうして祭神として祀られるようになったのか、の二点について、

もう一度見ていきたい。

当時、ギルドの人々はギルド内で重要と考えられた事項を石碑に刻み、ギルドホールに立てたが、糖餅行の人々も多くの石碑を残している。それらの碑文は、『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集』第五卷（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター 一九八〇、以下「資料集」と略）、および『明清以来北京工商会馆碑刻選編』（文物出版社 一九八〇、以下「碑刻選編」と略）に収められており、さらに、拓本が『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』（中州古籍出版社 一九九〇、以下「北拓」と略）に収録されている。ここでは、こうした碑文を中心的な資料として、上に書いた問題を考えていきたい。なお、以下に碑文を引用する場合は、「北拓」からの読み取りを基礎とし、

小論での略称	建立年	『資料集』の命名	『碑刻選編』の命名
雷祖会碑	嘉慶5年(1800)	馬神廟觀音殿碑	糖餅行雷祖会碑
『北拓』77卷69、70頁	雷祖勝会碑		
重修碑	道光7年(1827)	重修馬神廟碑	掲載なし
『北拓』79卷113、114頁	馬神廟碑		
行規碑	道光28年(1848)	馬神廟觀音殿碑	馬神廟糖餅行行規碑
『北拓』81卷150頁	九天雷祖勝会碑		
聖会碑	道光28年(1848)	馬神廟馬祖殿碑	糖餅行雷祖聖会碑
『北拓』81卷152頁	糖餅行碑		
万古流芳碑	同治元年(1862)	馬神廟馬祖殿碑	糖餅行万古流芳碑
『北拓』83卷16頁	糖餅行碑		
万善同帰碑	同治元年(1862)	掲載なし	糖餅行万善同帰碑
『北拓』83卷17頁	馬神廟糖餅行碑		
※「碑刻選編」は、同治6年に誤る。			
糖餅行碑記	光緒34年(1908)	馬神廟馬祖殿碑	馬神廟糖餅行碑記
『北拓』89卷152、153頁	糖餅行北案重整行規碑		

糖餅行関係碑刻表

読めない箇所などは、適宜、上記の二つの資料集を参照した。この論文で引用する糖餅行関係の石碑について、表を作成したので参照していただきたい。なお、今回の論文で引用していない碑は省略した。

一 馬神廟について

1 馬神廟と糖餅行

糖餅行はいつ馬神廟をギルドホールとしたのか。このことに関しては、次のような碑文がある。

雷祖会碑（嘉慶五年）

茲因都城沙窩門内大道傍、向有糖餅行馬神廟。歷來舖戶櫃案人等、於康熙四十八年、公捐銀八十餘兩。（中略）馬神廟原係糖餅行雷祖勝會。乃先人所置、遺留至今。向日原有茶館南果舖八十餘家。迄今九十餘載。

聖会碑（道光二八年）、万古流芳碑（同治元年）（この部分については、両碑はほぼ同文）

如我江南糖餅行、在京貿易已久。而（同治碑による）舖戶櫃案人等、向於康熙年間、即在沙窩門内道左之馬神廟、捐助銀兩、並置墳地、爲供奉香火之費。

以上の記事から、糖餅行と馬神廟の関わりは、康熙四八年（一七〇九）に銀八〇余両を糖餅行が馬神廟に寄進したことに始まり、馬神廟に銀を寄進したと同時に墳地を置いたことがわかる。

糖餅行には南案（南果舗と呼ばれる江南地方出身の菓子屋とその菓子職人のグループ）と北案（満洲餠餠舗と呼ばれる北京出身の菓子屋とその菓子職人のグループ、餠餠とは菓子の意味）という二つのグループが存在していたが、上に引いた碑文中の「向日原有茶館南果舗八十餘家」、「如我江南糖餅行、在京貿易已久」といった表現から、最初は江南出身の菓子屋および菓子職人のギルド、すなわち同郷・同業者ギルドであったと考えられる。後に地元である北京の菓子屋と菓子職人が加わったのであろう。また、茶館が糖餅行に加入していたのは、茶館のうちに菓子を焼くかまどを持ち、館内でさまざまな菓子を作って客に出していたものがあったので、糖餅行とつながりがあったためと考えられる。

まず、糖餅行がどのように馬神廟を管理していたのか見てもみよう。

糖餅行がギルドホールとした馬神廟の平面図が『資料集』

に載せられている。この図には馬祖殿、観音殿と「オヤジヤ娘ガ住ム」と書かれている建物が描かれており、馬祖殿にはこの廟の名のようになった馬祖が、観音殿には糖餅行の祭神である雷祖と観音菩薩、関帝がそれぞれ祀られている。道光二八年の「行規碑」と光緒三四年の「糖餅行碑記」には雷祖と並んで、観音菩薩と関帝の名も刻まれていることから、糖餅行では雷祖とともに観音菩薩と関帝も祀っていたことがうかがえる。

糖餅行では雷祖を祀っていた観音殿だけではなく、廟全体を管理していたようで、各碑文には、馬祖殿や山門・周囲の牆壁・前後大殿・東西配房など、廟の様々な建物について、糖餅行が金を出して修理したことが述べられており、嘉慶五年の「雷祖会碑」には住職を雇い廟内の管理を任せていたこと、廟内の管理が行き届かなければ、他の住職を招くことなどが述べられている。

では、糖餅行はなぜ広渠門内路北の馬神廟にギルドホールを置いたのか。このことについては、碑文には何も語られていない。土地の契約書や馬神廟の修理の帳簿などは、前門外鮮魚口にあった大興樓に保管されていたが、乾隆五五年（一七九〇）に火災に遭い、書類はすべて焼失してし

まった。このことは、嘉慶五年の「雷祖会碑」、道光二八年の「聖会碑」、同治元年の「万古流芳碑」、同治元年の「万善同帰碑」などに述べられている。このように繰り返し碑に刻されていることから、この大興樓の火災による書類焼失は、糖餅行にとつて重大事件であつたと考えられるが、この火災により糖餅行と馬神廟の初期の関わりを示す記録の多くが焼失したのではないだろうか。

2 馬神廟とその周辺

それでは、碑文には語られていない、「なぜ糖餅行は馬神廟をギルドホールとしたのか」という問題について、馬神廟はどのような場所にあつたのかを詳しく見ていきながら、その理由を考えていきたい。馬神廟の所在地については、資料によってさまざまな表現がされているので、それを次に挙げる。

都城沙窩門内大道傍

嘉慶五年雷祖会碑

広渠門内路北

同治元年万善同帰碑

北京外城・崇文門外臥仏寺西南

「資料集」

広渠門内棲流所三号

「碑刻選編」

牛角灣南馬神廟三号

「北平廟宇通檢」^①

北京市崇文区広渠門内安化寺 『北拓』
以上の場所の表記は、共通して現在の崇文区広渠門内大街とそこから北西に伸びる東花市斜街に挟まれた辺りを指しており、この地区は、現在では「国強東里」と呼ばれている。

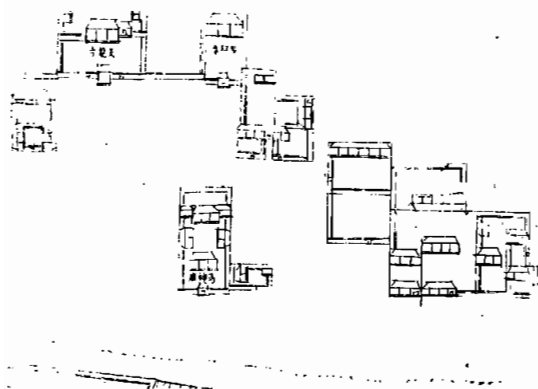


図1

さらにさかのぼって、現存する最大の北京図である『乾隆京城全図』には、すでに広渠門内に「馬神廟」の名が見え、その存在を確認できるが(図1、興亜院華北連絡部政務局調査所影印本「一九四〇」による)、ここでは清末から民

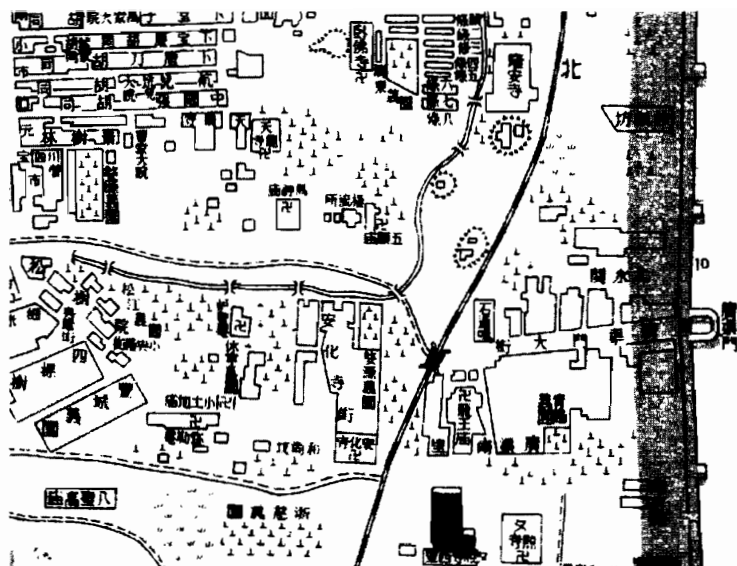


図 2

国にかけての馬神廟を取り巻く環境を知るために、民国時代の地図からこの地域の部分を抜き出してみたい。馬神廟は、けっして有名な廟でも大きな廟でもないから、民国時代の北京の地図を見ても、小縮尺のもの場合は、周囲にあった寺廟として後で紹介する、天龍寺、臥佛寺、隆安寺などは必ず記載されており、また馬神廟と敷地が繋がる棲流所も載せられていることが多いが、馬神廟については、書かれていない地図が多い。それは、後で引く『北京市崇文区地名志』（北京出版社 一九九二）に附載の歴代の歴史地図でも同様である。ここで図2として掲載したのは、一九三〇年代後半の物かと思われる中文の地図『北京名勝遊覧図』（最新地学社発行 発行年なし）で、やはり広渠門内に馬神廟が見える。ひよっとしたら一九四四年に馬神廟を調査した仁井田陞氏や奥野信太郎氏の一行も手にしていたかもしれない『北京市街地図』（新民印書館発行）という、昭和一九年の日付を持つ日本語版の地図があるが、この地図とまったく同じ版下を用いている。

さて、図2の地図を見ていくと、広渠門の周囲と、広渠門大街については民家と思われる建物があり、一方、北西の花市地区から続く住宅地区は、馬神廟の少し手前でとど

まわって、馬神廟の付近は建物もまばらで、寺廟や義地が広がっていたことがわかる。後で引用する奥野氏の文章のとおりだったと言っただけであらう。また、図1の『乾隆京城全図』でも、周囲に見られる建物の多くは寺や廟であり、民国期よりもさらに多くの寺や廟の名前を見出すことができるから、こうした光景はその当時からのものであったと考えられる。

具体的に周囲の景観を紹介してみると、東隣に隣接して棲流所、北は天龍寺、やや離れて臥佛寺、北東に隆安寺、東は五頭廟、南は広渠門大街と大石橋をつなぐ道と川（註19で引く仁井田氏の記録によれば「どぶ川」）を挟んで安化寺や爐聖庵があり、その間のおちこちに、広東義園や休寧義園、婺源義園、松江義園、安慶義園などといった墓地があった。

馬神廟の周辺に存在したこれらの寺廟について、『宸垣識略』の記事を手がかりに見ておこう。

棲流所 貧しい人々やホームレスを収容した施設。¹⁴

天龍寺 浙江省金華出身の人々の会館で、明の万曆

年間に建立、康熙二年（一六六三）に修理、

雍正五年（一七二七）の碑あり。¹⁵

隆安寺 明の景泰五年（一四五四）創建。¹⁶

臥仏寺 乾隆丙戌（三二）年（一七六六）の碑あり。

寺内に明の正徳年間の鐘があるが、他から移されてきた可能性あり。¹⁷

爐聖庵 明代に山西省出身の鍛冶屋ギルドにより建てられた。¹⁸

安化寺 明代の開山。正統八年（一四四三）に額を下賜される。¹⁹

一方、『資料集』は、仁井田陞氏による一九四〇年代の北京のギルド調査の成果をもとに編集されたもので、氏は、昭和一九年（一九四四）の秋から初冬にかけての調査の際に馬神廟を訪れているが、このときに同行した奥野信太郎氏が、「古燕日渉」²⁰に調査の様子を書き残しており、その中に馬神廟を訪問したときの記録もある。また、光緒三〇年の進士である陳宗蕃（一八七九—一九五四）が著した『燕都叢考』（一九三〇年に初版刊行）は、当時の各区ごとにその沿革、古蹟について、文献を引いて述べており、この時代の北京についての有用な文献である。「古燕日渉」と『燕都叢考』には、いずれも当時の馬神廟周辺の様子が具体的に述べられており、当時の状況を知るのに役立つ。

まず、「古燕日涉」には、馬神廟の近くには糸縫り工場
になっている南極廟があり、この廟の周辺には糸を繕る職
人がたくさん住んでいたこと、南極廟から路一つ隔てた東
側の高台に、演劇関係者の墓地である「江南春台義園」が
あったこと、この辺りには小高い丘が点在し、畑がひろが
っていたことなど、馬神廟から眺められたであろう風景や、
馬神廟をはじめとする建物の内部の状況・そこに暮す人々
の様子などが詳細に述べられている¹⁶。ここに描かれている
馬神廟周辺の風景は、糖餅行の碑文ではうかがい知ること
のできないものである。ちなみに、訪問時の馬神廟の様子
については、次のように書かれている。

臥仏寺から南に下って、先般一度きた南極廟に程近い
小丘に、馬神廟を訪う。ほとんど廃滅に瀕しているが、
建物は観音殿と馬神廟（以下馬神廟と書かれているの
は、馬祖殿のことと思われる、筆者¹⁷）とだけがのこっ
ている。糖餅行の信仰神である。但し糖餅行の祖神と
して祭るところのものは、馬神ではなくして、観音殿
中の雷祖である。観音殿の内部に碑一基、殿前に左右
二基、馬神廟内部に六基、計九基ある。馬神廟の荒廃
は、殊のほかで、屋根は破れ、青空がつつぬけに仰ぎ

みられるばかりでなく、棺桶が、あまり広くもない廟
内に、長々と三つも横えられているあたり、まさに
『聊齋志異』中の情景である。

これは一九四四年の馬神廟の様子であるが、中華民国二五
年（一九三六）に出版された『北平廟宇通檢』には「もと
は北京の糖餅商の会所であったが、現在はずでにひどく荒
れ果てている¹⁸」とある。仁井田氏一行の調査の八年前の一
九三六年には、馬神廟からはすでに糖餅行は立ち退いてい
て、馬神廟の荒廃がかなり進んでいたことがわかる。

次に、『燕都叢考』に描かれている馬神廟周辺の様子を
見てみよう（第三編・外三区各街市）。

自牛角灣胡同而南俱爲荒野、西有天龍寺、馬神廟、稍
東有臥佛寺、再東爲隆安寺、爲廣東義園、（以下略）
自廣渠門大街而南以達于左安門、均爲荒涼寂寞之區、
蔬圃畦畦、頽垣廢冢、一望皆是。其有名稱可記者、惟
二三寺廟而已。

やはり、荒れ果てた土地、野菜畑や麦畑、崩れ落ちた垣
や墓が続く風景であったことが述べられている。これらの
文献の記述によっても、馬神廟は畑や荒地の中に寺廟や墓
地、小さな丘が点在する町外れの寂れたところにあった、

という地図の上で受けた印象を確認することができる。

ところで、『資料集』に見える仁井田氏の調査の対象となった会館・公所の所在地を整理してみると、多くの会館・公所は外城のメインストリートである前門大街を挟んで東西にあり、西は宣武門以西、東は崇文門以東になると、その数は少なくなる。馬神廟の近くにも、前に挙げた爐聖庵という山西省出身の鍛冶屋ギルドの会館も存在したが、やはり他のギルドホールと比べて、馬神廟が辺鄙な場所にあったという感はいなめない。

このような町外れにある馬神廟を、糖餅行がなぜギルドホールとするようになったのか、その理由は碑文にも記されておらず、また他の資料も発見できていないため、残念ながら不明である。そこで、馬神廟周辺に糖餅行の人々に関わりのある場所が存在した可能性がないか考えてみたい。

二〇頁で引いた道光二八年の「聖会碑」に「並に墳地を置き」とあり、嘉慶五年の「雷祖会碑」には「原有契紙、並西南墳地契紙、共計八張」という語が見える。後者の墳地がどこに置かれたものかはわからないが、前者のものは、おそらく馬神廟、あるいはその近傍に彼らの墳地が置かれたことを示すのであろう。馬神廟の西南には、すでに地図

で見たように、松江義園、休寧義園があり、さらに南には浙慈（浙江省慈谿）義園、安慶（安徽省）義園、「古燕日涉」で登場した春台義園や浙紹（浙江省紹興）義園があり、この辺りには江南出身者の墓地が多かったことがわかる。

江南出身の人々と関係の深かったこの一角に、当初は江南出身者のギルドであった糖餅行の人々が墳地を置き、そこからほど近い馬神廟をギルドホールとした可能性が考えられないだろうか。²⁰

ちなみに、建国後はこの地域がどうなったかについても書いておきたい。上に書いたような状況は、建国初期である一九四九年の地図を見てもあまりかわっていない。しかし、『北京市崇文区地名志』の樓流所の項によれば、建国後この地区の都市建設は急速に発展し、樓流所、婺源義園、馬神廟、五顯廟などのあった場所には、次々と新しいアパートが建てられ、これらの建物は歴史上のものとなったということである。事実、一九六〇年代の大縮尺図では、この地区はまったく都市化してしまっており、多くのアパートと思われる建造物を地図上に見出すことができる。同書の崇文区・国強東里の項目を見ても、一九五〇年代後期に「樓区」の建設が始まったとある。したがって、現在のこ

の地区には、奥野氏が馬神廟を訪れた時代の面影はほとんどないと思われる。

以上、糖餅行が馬神廟にギルドホールを置く理由を考え てみたが、残念ながら結論を得られていない。墓地や畑に 囲まれた町外れの馬神廟をギルドホールとしたのはなぜか、 今後の課題としたい。

二 雷祖と糖餅行

糖餅行の主祭神である雷祖は、その名の通り「雷の神」 で、九天応元雷声普化天尊という。明代の小説『封神演義』 の中で、殷の紂王の太師であった聞仲が雷部の神の統領で ある九天応元雷声普化天尊に封じられたことから、雷祖 九天応元雷声普化天尊 聞仲とされる。仁井田陞氏は、『中国の社会とギルド』の中で「これ（馬神廟のこと、筆者）に観音菩薩及び關帝と共に、雷祖即ち封神傳にいう殷 の紂王の武將の聞仲を祀っていた」と述べており、ギルド が祀る守護神や創始者について多方面から述べている『中国 行業神崇拜』でも、この仁井田氏の文を引用している。²¹⁾ そして、『中国行業神崇拜』には、『北平各行祖師調査紀略』

に糕点業が聞仲を祀った理由として、糕点を焼く炉を聞仲 が発明したと伝えられているからだと記されているが、その 根拠は何であるかわからない、とある。²²⁾ また、碑文の内容 を見ても、雷祖が糖餅行の人々に祀られるようになった 理由は見あたらない。この問題を考える材料として、糖餅 行以外で雷祖を祀るギルドにはどのようなところがあった のかを、見ていこう。

彭澤益主編『中国工商行会史料集』（中華書局 一九九五）には、宣統三年（一九一）に出版された『湖南商 習慣報告書』に所載の湖南省各地の各種の職業の規約が引 かれていて（上冊 第三編 各省工商行業条規選輯）、食 物に関するさまざまな職業の人々が雷祖を祀っていたこと がわかる。すなわち、規約の中に雷祖を祀ることが記され ている職業として、齋館（規約中に菓子の値段を規則で定 めるとあることから、菓子をあつかっていたと考えられる）²³⁾

- ・ 面店粉館（麵類などの粉製品を供する食堂のようなところか）
- ・ 甜酒粉館（酒と粉製品を供する食堂のようなところか）
- ・ 豆腐它粉水粉業（它粉が何を指すのか不明であるが、「豆腐它粉」で豆腐とその粉、すなわち豆腐とおからのようなもの、春雨をあつかう店ということか）
- ・ 茶館・

碓坊（精米所）・糖坊（製糖工場）・芽菜（豆もやしをあつかう）・鶏鴨焼腊（鶏やアヒルのあぶり焼き）・粮食糟坊（穀類・イモ類で酒を造る酒造所）などがある。それ以外にも棧店（表装店）・紙盒店（紙箱をあつかう店）なども雷祖を祀っていると書かれているが、ここでは食物に関する様々な職業が雷祖を祀っていたということに注目したい。この『湖南商事習慣報告書』には、残念ながらどの職業についても雷祖を祀る理由は述べられていないが、前出の『中国行業神崇拜』には、糖餅行以外にも雷祖を祀っていた職業が挙げられており、その理由は次のように述べられている。

湖南地方などの料理人

『行業祖師瑣談』には、五穀をだいなしにすると雷にうたれ、多くの穀物を携えて雷祖を祀ると、雷にうたれるのを避けることができるという民間の迷信があり、これが雷祖を祀る源になっているとある。²⁶⁾

内江（四川省）の精米所

雷祖を祖師として信奉する理由は、聞いたところによると、米の糠を取るときに出る白のゴロゴロという音が雷鳴に似ていることから、雷祖を祖師として信仰し

た。²⁶⁾

時代はさかのぼるが、『太平広記』卷三九三・「華亭堰典」（出典は唐の『原化記』）に、雷にうたれることについての問答がある。「牛・木・魚までもが何の罪で雷にうたれて死ぬのか」という問いに、「牛や魚は田畑に踏み込んで水を傷め、稲の苗を害しているからだ」と答えている。さらに「水が損なわれるのはわずかなことであるのに、どうして罰は大きいのか」と問われて、「五穀は万人の命、国の宝であるので、天はこれらを誅し、人々を戒めたのである」と答えている。²⁷⁾ この問答は、五穀を粗末にする者は雷にうち殺されるという考えが、古くから存在したことをうかがわせる。

あるいは、清代の道光年間に刊行された蘇州の年中行事記である『清嘉録』には、六月二四日の雷祖の誕生日について述べられている。雷祖像が祀られている城内の玄妙観や閶門外の四図観の賑わいが描かれた後に、六月一日から雷祖の誕生日の二四日まで精進食を食べる「雷齋」という行事のことが記されている。「雷齋」をおこなう人々は人口の八、九割にものぼり、この時期は食肉店も休業するほどであったという。また、この期間中、雷を聞いた時から

精進の食事を始める人もおり、たとえ食事中であっても雷が聞こえたならば、すぐに精進食に切り替えたとある。²⁸⁾

この「雷齋」という行事には、雷除けのまじないのような意味があったのではないだろうか。雷除けのまじないが、なぜ肉を断ち精進の食事をすることになるのかといえば、贅沢な食事をせず、食物を無駄にしないことを雷祖に示し、その怒りに触れないように身を慎んだということであり、雷祖＝食物の守護神という考えが、根底にあったのではないかと考える。先に挙げた『太平広記』の「華亭堰典」に記されている問答からも、雷神＝食物の守護神という考え方がうかがえる。

雷祖を食物の守護神と考える上で注目したいのは、雷祖と雨の関係である。この関係を述べる上でポイントとなるのは、雷祖の誕生日とされる六月二四日であると考えられる。次に雷祖の誕生日についてみていきたい。

雷祖の誕生日について、中村喬氏は、『清嘉録』の訳註『清嘉録』蘇州年中行事記』 東洋文庫 一九八八)で、『雷齋』に註して、『明史』に六月二四日は九天応元雷声普化天尊示現の日とし、毎年この日に顯靈宮に役人を派遣し祭を行っていたことが見えるが、この雷尊示現の日が誕生

日とされるようになったらしい、と述べている。²⁹⁾ 六月二四日がなぜ雷祖示現の日、すなわち雷祖が靈験を現す日とされたのかといえば、雷雨がもっともよく発生する時期であったからと考えるのが自然であろう。清末に記された北京の代表的な歳時記の一つである敦崇の『燕京歳時記』にも、「六月は大雨がよく降る時期である」と記されている。

昭和一六年から二一年(一九四一～一九四六)までの五年にわたり、北京輔仁大学で教鞭をとりながら中国の民俗を調査・研究した直江広治氏は『中国の民俗学』の中で、旧六月を中心に前後二ヵ月は多雨・高温であるため作物の成長には重要な時期であることと、旧六月に水神の祭りが多く行われることを挙げ、水の徳を仰ぐことの厚い農民が、この時期に水神の祭りをいとなむことは誠にふさわしいことである³⁰⁾、と述べている。

人々が雨期に作物の成長に必要な雨を待ち望んでいたことは、容易に想像できよう。これらのことから、農作物の成長に欠かせない雨が降る季節に誕生日を持つ雷祖は、恵みの雨をもたらす神とみなされていたのではないかと。とすれば、農作物の実りに不可欠な雨をもたらす雷祖を、食物の守護神と考えることは自然なことであり、食物に関係す

る職業の人々が雷祖を信仰したこともまた自然なことであるといえよう。以上のことから、糖餅行の人々が雷祖を信奉した理由も、食物の守護神としての雷祖が主で、聞仲は後から結び付けられていったのではないかと考えられる。

次に、なぜ雷祖が聞仲と結び付けられるようになったのかだが、『中国行業神崇拜』には、聞仲が登場する『封神演義』について、職業の守護神を決める時に最も多く取り入れられた通俗小説であること、登場人物が多く物語の内容が豊富で、神を祀る際の根拠として選べる材料をより多く提供していることも、守護神を決める時により多く取り入れられた理由であることが述べられている。

『封神演義』が清代の人々に親しまれていたことを具体的に示す例として、元宵節に飾られた提灯がある。清の謙廉の『京都風俗誌』には、街中に飾られていた提灯には、どのようなものがあったのか記されており、提灯に描かれていた図柄として、日本でもお馴染みの『西遊記』、『水滸伝』などとともに『封神演義』の登場人物も挙げられている。多くの人々に親しまれた元宵節の提灯に描かれたことは、『封神演義』が当時の人々にとって馴染み深い小説であったことを示していると言えよう。広く親しまれた小説

の中で雷神の統領に封じられた聞仲は、代表的な雷神とみなされていたので、雷祖とも自然に結び付けられていったのではないかと考える。

おわりに

以上、北京の菓子屋および菓子職人のギルドである糖餅行のギルドホールであった馬神廟と、その祭神の雷祖について見てきた。まず、外城の東北よりの広渠門にほど近いという、他のギルドには例の少ない馬神廟の所在地について検討したが、この地区に江南出身者の義地が多く南案との関係が想定されるものの、糖餅行との結びつきについての必然性を示す要因は見当たらず、明確な答えを提示できなかった。また、祭神である雷祖と菓子屋ギルドとの関係をめぐって、この神が、食物、とくに穀類とかかわりの深いこと、他の食品業関係のギルドでも祀られていることを紹介したが、こちらについてもその結びつきの理由について、いまだ十分に明らかにできなかったとは考えていない。今後の課題としたい。最後になったが、今回の小論を書くにあたり、資料をご提供くださり、様々なアドバイスをい

ただいた森田憲司先生に、心から感謝の意を表したい。

註

(1) 北京の人々と菓子とのかかわりについては、「清代北京の菓子屋とお菓子」と題して、『アジア遊学』四七号(勉強出版 二〇〇三)にも執筆している。

(2) 『都市叢談』(逆旅過客撰 北京古籍出版社 一九九五)

素茶館

帶紅爐者名爲「江南茶社」、(以下略)

「紅爐」について、『昔日北京大觀』(果鴻孝著 中国建材工業出版社 一九九二)には、次のようにある。

戲園子與茶館兒

茶客在這里可以喫到本茶館制做的糕点、如芙蓉糕・薩其瑪・紅爐等。這是因爲茶館本身設有烤爐(稱紅爐)。

このように、「江南茶社」では菓子を焼くかまでである「紅爐」を持っており、この「紅爐」で焼いた菓子を客に提供していたことがわかる。

(3) 道光二八年の「行規碑」では、「雷祖聖會」の四字が横書きされた下に、

伏魔大帝

觀音大世

九天雷祖

の、三行がならぶ。

また、光緒三四年の「糖餅行碑記」では、碑文の末に次のように記されている。

關聖帝君

觀音大士

聖會

九天雷祖

(4) 嘉慶五年 雷祖會碑

向日原有茶館南果舖八十餘家、迄今九十餘載。以來翻蓋

大殿、前後殿宇、以及兩廂房、屢次重修。

道光七年 重修碑

於道光壬午春重修雷祖聖殿、馬神聖殿、關帝聖殿。度材

鳩工、共錢壹千貳百餘千。越丁亥夏、又藉公捐修理山門

週圍岸界。工用費錢肆百餘千。

道光二八年 行規碑

十六年重修大殿一座。京南兩案合行、共捐資錢二千三百

二十一吊。(中略)二十六年重修群牆、合行共捐資錢八

百二十吊整。

道光二八年 聖會碑

道光二十七年二月十九日、修理羣牆。南案共用錢二百吊

文正。

同治元年 万古流芳碑

同治元年三月初二日、修立週圍垣、前後大殿、東西配房

山門内外脚門。共用錢貳仟貳百陸拾貳吊捌拾文。

同治元年 万善同歸碑

同治元年三月初二日、修理週圍群牆、前後大殿、東西配

殿、山門内外大小角門、添置幔帳等項、以上共用錢兩千兩百陸拾貳吊捌百捌拾文。

(5) 嘉慶五年 雷祖會碑

現今請有達慧和尚、照看廟宇所有一切香火。(中略) 倘住持視廟中香火淡薄、住持不力、許值年會首通知總理會首、公議另召住持。

(6) 嘉慶五年 雷祖會碑

原有契紙、並西南墳地契紙、共計八張。又東角門外院地契紙、俱交前門外鮮魚口內大興樓劉德全收存。不意大興樓於乾隆五十五年十二月被天災燒燬。

道光二年 聖會碑

所乾隆五十五年、司事大興樓天災。將地契及修蓋殿宇賬目、均被焚化無存。

同治元年 万古流芳碑

自乾隆五十五年、司事者大興樓天災。將地契及修蓋殿宇賬目、均被焚化無存。

同治元年 万善同歸碑

其殿宇地契修蓋帳目、寄大興樓收存。自乾隆五十五年、此舖均被天火焚化無存。

(7) 許道齡編 国立北平研究院史学研究会 一九三六

(8) 『北京市崇文区地名志』の樓流所の項には次のように書かれている。

樓流所は、崇文区の東北部、東花市街道并事処の界内、広渠門内大街東端北側に在る。樓流所は早くに存在せず、

現在は学校、工場、民居が混じりあった地区である。

(中略) 清代には外城東城の樓流所は廣渠門内、發源義園の北にあった。宣統年間の『清北京城図』の「外左三区」のところに「樓流所」とある。民国二六年(一九三七)になると、樓流所は存在しなかったが、その地名だけは一九四九年までずっと保持された。(筆者訳)

また、日本の清國駐屯軍司令部が編纂した『北京誌』(博文館 一九〇八)の第二八章公私慈善事業・第三節樓流所には、次のようにある。

樓流所は、原来其の名の示すが如く流民を樓止せしむるにあり。支那にては人民の郷を去りて他に移る者多く、終に流民となる者亦少からず。政府は此等流民は勉めて之を原籍地に送還するの主義を採るを以て、一時彼等を樓ましむる為に樓流所は出来たるなり。然れども今日にては必ず他省の流民に限らず、一般貧民を收容す。(句読点は筆者)

(9) 『宸垣識略』卷九 外城一

天龍寺在下鍋腔胡同、係浙金華會館。明萬曆中建、本朝康熙二年修。有雍正五年碑。

(10) 同

隆安寺在花兒市東南、明天順間廢刹也。(中略)考(『日下舊聞考』を指す、筆者)按、隆安寺今存、創於明景泰五年、寺中有題名碑可考。

(11) 同

臥佛寺在崇興寺東口、入山門有圓殿、佛立其中。後殿有臥佛、長一丈二尺、有十三佛環立肩背後。寺無碑記、祇西廊一鐵鐘、明正德戊辰年所鑄、稱妙音寺。長元按、寺有乾隆丙戌年翰林侍讀學士圖塔布碑。又張爵五城坊巷志、崇南坊有妙音寺、今無存。寺内正德間鐘、或是彼處移來、未可知也。

(12) 同

爐聖菴在廣渠門内、創於明代、係山西治行所建、祀老君、(以下略)

(13) 同

安化寺在崇南坊興隆街、明釋曇蘊開山、正統八年賜額、(以下略)

(14) 「古燕日涉」は、『日時計のある風景』(文藝春秋新社 一九四七)に収録されている。

(15) 「古燕日涉」にも、皮箱行(鞆業ギルド)の会館である東極宮を探すくだりで「燕都叢考」が引用されている。

(16) 「古燕日涉」では、馬神廟の周辺について次のように描かれている。

臥佛寺の傍から、畑のなかに入りこんで、南極廟に赴く。この辺には、糸を縫る職人がたくさん住んでいる。(中略) 南極廟は道路からみると、やや小高い位置にある。廟内には、売ものらしい線香がうずたかく積まれてはいるが、これも糸縫りの工場になっていて、職人が二三はたらいいてはるほか、古碑その他目ぼしいものは一つもなし。俳優や

劇に關係のあるものと尋ねてみると、職人の一人が、路一つ隔てた東側の高台の建物がそれだと教えてくれる。行ってみると、なるほど土壇をめぐらした一郭に、「江南春台義園」と書いてある。(以下内部の様子が描かれているが、ここでは省略する)裏の畑地には、一面に、劇界關係者の墓がたっている。試みに石標のあるものを拾ってみると、最も古いところで咸豐同治、新しくなると光緒から民国何年の文字が見え、また江蘇人誰々とか、黃岡県人某とか書いてある。(中略)

臥佛寺の側から、路を南にとり、畑のなかを進む。もう空気がずいぶん冷たい。馬祖廟(馬神廟と思われる、筆者)の前の、谷底のように低い埃路を一旦越して、前方の高地上り、しばらく歩いて西に折れたところに、伊聖庵がある。このあたりは蔬菜の青さが眼に沁みるようだ。農夫や娘たちが忙しそうに立ちはたらいっているが、この辺としてはものめずらしいわれわれの姿にも全く無関心でいてくれる。

(17) 「資料集」には馬神廟の平面図が掲載されているが、ここに描かれている馬祖殿内には碑六基、棺三つが描かれており、「古燕日涉」の内容と一致する。

(18) 「北平廟宇通檢」上編
舊爲京師糖餅商會所、今已破敗不堪。

(19) 「資料集」の爐聖庵の項に引かれた仁井田氏の調査日誌には、「何と馬神廟とはどぶのような川筋一つへだてたすじ

向い」とある。

(20) もう一つ考えられる可能性としては、仕事場や住居が近くにあったことである。たとえば、北京のギルドの中で紙業ギルドは、宣武門外の白紙坊に会館（紙行会館）をもっていたが、白紙坊には紙造りを仕事とする人々が居住していたと「宸垣識略」にある（巻一〇 外城二・白紙坊）。しかし、馬神廟周辺の地名などを調べたが、先程からも挙げられているように周囲は畑地や墓地などが多く、菓子工房に關連すると考えられるような地名やその存在を示す資料は、見つかっておらず、その可能性は少ない。

(21) 仁井田陞著『中国の社会とギルド』（岩波書店 一九五二）
李喬著『中国行業神崇拜』（中国華僑出版公司 一九九〇）

下編 分述 七飲食類 糕点業・酥餅業

糕点業所奉雷祖即「封神演義」中殷紂王的大臣聞太師聞仲。「基爾特集」(「資料集」のこと、筆者) 関于馬神廟中所奉之神有段注文、其中談到「廟中所祀雷祖即「封神傳」中殷紂王的武將聞仲。」(按・聞仲非武將)

(22) 同

『調査紀略』（崇璋氏による「北平各行祖師調査紀略」の略、筆者）記有糕点業奉聞仲為祖師の理由…(「糕点舖」所供之祖師、則頗奇特、乃俗傳紂王時代之聞仲、相傳烙制糕点之、皂爐、烤制糕点之、吊爐、烟爐、等、均為聞仲所發明。)(中略)糕点業所謂聞仲發明皂爐等工具の傳説不知是根據什麼附會出來的。

(24) 『中国工商行会史料集』上冊 第三編 各省工商行業条規

選輯

高館条規(省城)

一、我行創自乾隆、糕餅值目定案規章、(以下略)

(25) 『中国行業神崇拜』 下編 分述 七飲食類 厨業

湘潭等地厨業奉雷祖為祖師。「瑣談」(夏振榮氏の「行業祖師瑣談」の略、筆者)云「湘潭雷祖殿供雷祖大帝神位、是厨師的祖師、六月二十四日祭祀。又記何以奉其為祖師、厨業奉雷祖為祖師源于民間迷信、說糟踏了五穀會遭雷打、故用很多糧食去祀雷祖、可避免雷打。」

(26) 『中国行業神崇拜』 下編 分述 七飲食類 糧食業

内江の籩房(將稻穀加工成大米の作坊)也奉雷祖為祖師、毎年六月二十四日奉辦雷祖會。奉雷祖為祖師の理由據說是因加工稻米打去糠皮時籩子轟轟作響、近似雷声、故奉雷祖為祖師。

(27) 『太平広記』卷三九三 華亭堰典

吳越間震死者非少。有牛及鱒魚樹木等、為雷擊死者。皆聞於縣辯讞。或曰人則有過、天殺可也。牛及樹木魚等、豈有罪惡而殺之耶。又有弑君弑父殺害非理者、天何不誅、請為略說。洞庭子曰、昔夏帝武乙、射天而震死。晉臣王導、寢栢而移災。斯則列於史籍矣。至於牛魚、以穿踏田地、水傷害禾苗也。或曰、水所損亦微、何罰之大。對曰、五穀者萬人命也。國之寶重。天故誅之、以誠於人。

(28) 『清嘉錄』卷六 雷齋 接雷素

二十四日爲雷尊誕。城中玄妙觀、閩門外四圍觀、各有神像。蠟炬山堆、香煙霧噴、殿前宇下、袂雲而汗雨者、不可勝計。(中略) 自朔至誕日茹素者、謂之「雷齋」、郡人幾十之八九、屠門爲之罷市。或有聞雷茹素者、雖當食之頃、一聞虺虺之聲、重御素餽、謂之「接雷素」。

(29) 雷神とされるものの数はきわめて多いが、ここにいう雷尊は道教において天の雷部の三十六神(二十四神ともいう)を総領する九天応元雷声普化天尊を指す。これを六月二十四日に祭ることは、『明史』礼志四に「雷声普化天尊は、道家の以て五雷を総司すと爲すところなり。又た六月二十四日を以て天尊示現の日と爲し、故に歲ごとに是の日を以て官を顯靈宮に遣し致祭す」と見える。これは弘治元年(一四八八)に尚書の周洪謨らが、風雲雷雨は山川壇で祀るもので、この祭は罷めるべきであると論じた中の語であるが、それまでは示現の日として官祭されていたことがわかる。この雷尊示現の日が生日とされるようになったらしく、下って万曆末の『月令採奇』六月雜記には「二十四日、九天応元雷声普化天尊の誕」とある。

(30) 敦崇著『燕京歲時記』 掃晴娘
六月乃大雨時行之際。凡遇連陰不止者、則關中兒女剪紙爲人、懸於門左、謂之掃晴娘。

(31) 直江広治著『中国の民俗学』(岩崎美術社 一九九六)
行事伝承 五祈雨
旧六月を中心に前後二カ月は多雨しかも高温であるため、

作物の成長には重要な期間である。旧六月十八日は竜王の誕生日とされ、各村の竜王廟の廟会が行なわれるが、また十七日は水母娘娘という水神の誕生日とされている。揚子江流域の水神である二郎神の誕生日も二十六日とされており、水神の威力が特にこの期間に強く発動される。水の徳を仰ぐことの厚い農民が、この時期に水神の祭をいとむことは誠にふさわしいことである。しかし、この雨期は華北においてしばしば降水の確実性を欠き、農作物の収穫に大きな変化を与える。時正に麦・粟・高粱など重要な作物の成熟期である。したがって、もしこの時期に旱魃がつつけば、それは農民にとっては死活に関する大問題であり、農民は熱心に大規模な雨乞の行事を行なうことになる。

(32) 雷祖と聞仲について、『中国行業神崇拜』(下編 分述 七 飲食類 厨業)には、次のようにあり、
関于該神的來歴、又有或即黄帝、或即神霄真王、或即『封神』中之聞仲三說、其中以聞仲之說較爲流行。
雷祖の素性には三つの説があったが、そのうち聞仲とする説がより流行したと述べられている。

(33) 『中国行業神崇拜』 上編 概論 二 行業神的形成 通俗小説與行業神
『封神演義』是從業者造神時取材最多的一部通俗小説。(中略) 同時、該書所写人物衆多、故事豐富、可供選採作為奉神根據的材料較多、也是從業者造神取材較多的原

③4 譚廉著「京都風俗誌」

因。

其燈有大小、高矮、長短、方圓等式、有紗紙、琉璃、羊角、西洋之別。其繪人物則《列國》、《三國》、《西遊》、《封神》、《水滸》、《志異》等圖、花卉則蘭、菊、梅、桂、萱、竹、牡丹、禽獸則鸞鳳、龍虎、以至馬牛、貓犬與魚蝦、蟲蟻等圖、無不顏色鮮美、妙態傳真。品目殊多、頗難枚舉。